

研究大学コンソーシアム の活動について 2019

研究大学コンソーシアム全体会議議長
山本 進一

研究大学コンソーシアムとは？

研究大学コンソーシアム（RUC:Research University Consortium）の概要

- 発足：平成29年8月4日
- 構成：研究力強化に積極的に取り組む大学の研究担当理事または副学長の集まりとして組織。現在は33機関で構成。
- 目的：研究力強化に取り組む大学及び大学共同利用機関法人（以下「大学等」という。）がコンソーシアムを形成し、各大学等における先導的取組や課題の発信・共有によりネットワーク化を推進するとともに、それら取組の全国的な普及・定着を目的とする。

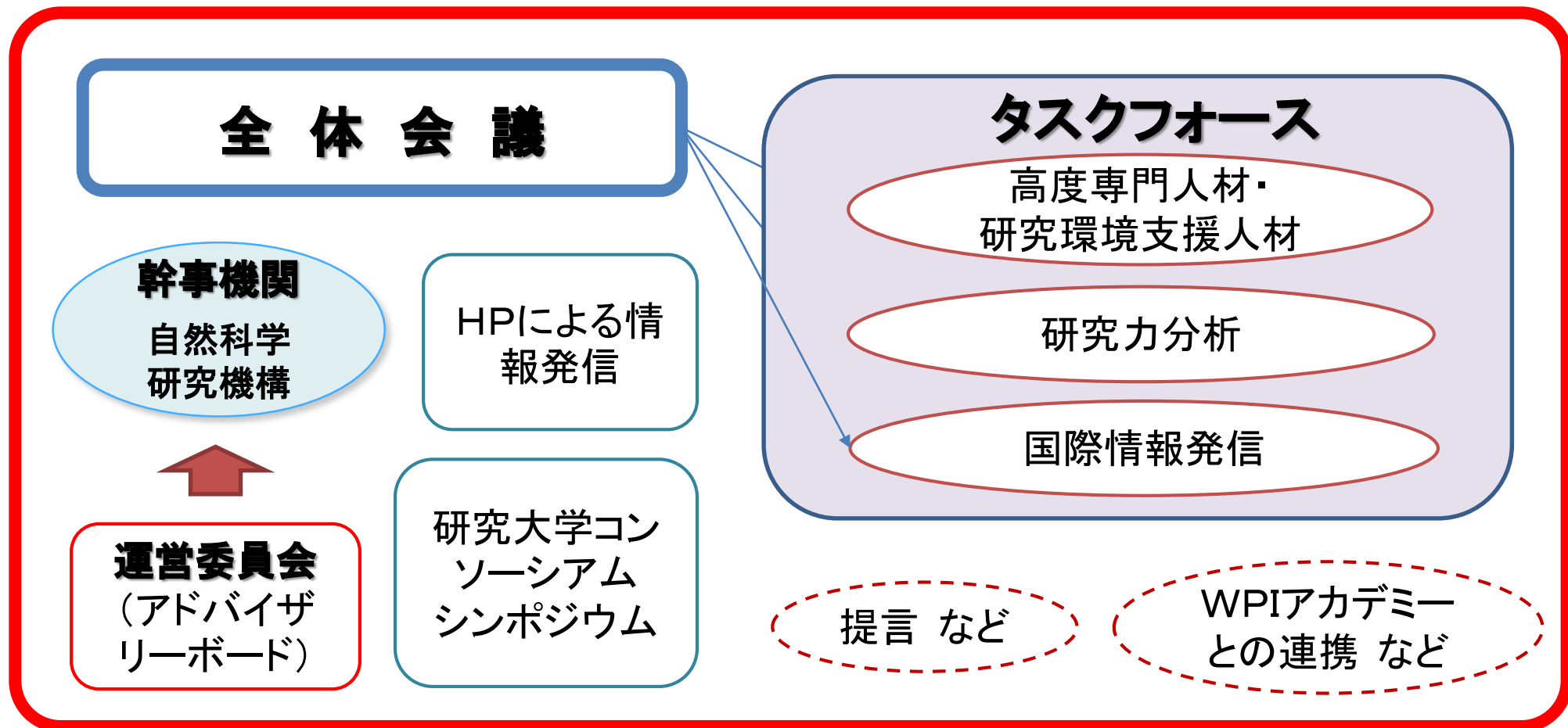
（「研究大学コンソーシアム規約」（平成29年8月4日 研究大学コンソーシアム全体会議）より）

- 活動：
 - ・ 会議体での好事例の共有
 - ・ HPやシンポジウムを活用した情報発信・共有
 - ・ 各大学等における共通の課題等をテーマとして、タスクフォースを設置し、必要に応じ文部科学省の関係部局も交えるなどして、俯瞰的に討議

研究大学コンソーシアム構成機関

1	北海道大学	18	大阪大学
2	東北大学	19	神戸大学
3	筑波大学	20	岡山大学
4	千葉大学	21	広島大学
5	東京大学	22	山口大学
6	東京医科歯科大学	23	九州大学
7	東京農工大学	24	九州工業大学
8	東京工業大学	25	熊本大学
9	電気通信大学	26	奈良先端科学技術大学院大学
10	新潟大学	27	首都大学東京
11	金沢大学	28	早稲田大学
12	福井大学	29	慶應義塾大学
13	信州大学	30	東京女子医科大学
14	名古屋大学	31	自然科学研究機構
15	名古屋工業大学	32	高エネルギー加速器研究機構
16	豊橋技術科学大学	33	情報・システム研究機構
17	京都大学		

研究大学コンソーシアム 概要



※幹事機関を自然科学研究機構が担い世話役を務めるとともに、議論に際しては継続的な議論を行うようにつとめる。
※自然科学研究機構による運営にアドバイスをするアドバイザーリーボードとして運営委員会を設置。

運営委員会構成機関 (計10機関)

筑波大学
岡山大学

東京大学
九州大学

名古屋大学
熊本大学

京都大学
奈良先端科学技術大学院大学

大阪大学

自然科学研究機構

○第3回（メール開催）

- 日 時:平成30年9月6日(木)～9月12日(水)
- 議題:
 - 『INORMS 2020』への参画について



○第4回

- 日 時:平成31年3月8日(金) 13:30～15:30
- 場 所:明治記念館「曙の間」(1階)(東京都港区元赤坂2-2-23)
- 議題:
 - 2018年度活動報告及び2019年度活動計画について
 - INORMS世界大会in広島におけるプレナリーセッションの企画・運営について
 - 高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関する議論のまとめについて
 - URAに係る認定制度の導入に向けた関係団体との連携について
 - 研究大学コンソーシアムへの参画について
 - 研究大学コンソーシアム規約の改正について

○第4回

- 日時:平成30年7月27日(金) 13:30~15:30
- 場所:自然科学研究機構事務局会議室(東京都港区虎ノ門4-3-13 ヒューリック神谷町ビル2階)
- 議題:○シンポジウムの開催について
○研究大学コンソーシアムの構成機関について
○『INORMS 2020』について

○第5回

- 日時:平成31年2月26日(火) 13:30~15:20
- 場所:スタンダード会議室 新虎ノ門店 ホールB(東京都港区虎ノ門3-6-2 第二秋山ビル4階)
- 議題:○2018年度活動報告及び2019年度活動計画について
○INORMS 2020プレナリーセッションの企画・運営について
○高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関する議論のまとめについて
○URAに係る認定制度の導入に向けた関係団体との連携について
○研究大学コンソーシアムへの参画について
○研究大学コンソーシアム規約の改正について 等

○第6回

- 日時:令和元年7月12日(金) 13:30~15:00
- 場所:AP虎ノ門 会議室C(東京都港区西新橋1-6-15 NS虎ノ門ビル(日本酒造虎ノ門ビル)11階)
- 議題:○シンポジウムの開催について
○エグゼクティブセミナーの開催について
○研究力強化人材育成ワークショップについて
○研究大学コンソーシアムの今後に関するアンケートについて
○リサーチ・アドミニストレーター認定制度にかかる議論について 等

研究大学コンソーシアム タスクフォース

(1) 高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関するTF

目的:URAを含む高度専門人材・研究環境支援人材の活用について、補助金事業終了後も日本の研究現場への定着をはかるため、今後の、大学等への内在化、人材流動化、などについて、大学執行部の立場から、好事例やエビデンスの収集、必要な方策に関する情報共有・議論を行う。

(2) 研究力分析の課題に関するTF

目的:各大学の研究力の特徴を多角的な視点で把握するため、研究力分析指標を活用した研究IR、戦略立案に関して、各大学・研究機関における好事例ならびに必要となる関連情報・エビデンスの収集と共有を目的とする。

(3) 国際情報発信に関するTF

目的:とくに国際情報発信に関して、これまで、東京大学・京都大学と自然科学研究機構の国際広報担当者が中心となり、AAASのEurekAlert!に共同加入するなど国際情報発信プラットフォームをつくり、連携して日本の研究大学における国際情報発信をもりたててきた。これを引き続きこのコンソーシアムの中でタスクフォースをたて、プラットフォームの運営を行っていくとともに、国際情報発信に関する好事例等の情報共有をすすめていく。

高度専門人材・研究環境支援人材の 活用に関するタスクフォース

座長

自然科学研究機構 客員教授

山本 進一

URA認定制度導入推進委員会(RUCからの参加者:山本進一・小泉 周)

第1回: 平成31年3月18日
URA関係団体間の打ち合わせ
自由討論
URA認定制度について

第2回: 令和元年7月18日
協議事項
1. 推進委員会の体制について
報告事項
1. 委託事業について
2. 実務担当者によるワーキンググループでの協議内容

実務担当者ワーキンググループ(RUCからの参加者:小泉 周)

令和元年6月11日
具体的検討を進めるに関して、土台となる事項に関する共通認識

リサーチ・アドミニストレーターに係る質保証制度の構築に向けた検討体制

文部科学省

全体方針の策定

リサーチ・アドミニストレーター活動の強化に関する検討会

質保証（認定等）の在り方の検討等

調査研究の委託

成果の報告

受託機関（金沢大学）

調査研究の実施

- ・ 調査、制度の試案作成
- ・ 検討状況のとりまとめ
- ・ シンポジウムの開催

協力者会議



参加・連携

URA関係団体

推進委員会（各団体間の合意形成の場）

リサーチ・アドミニストレーター協議会

学術研究懇談会（RU11）

多能工型研究支援人材育成
コンソーシアム

研究大学コンソーシアム（RUC）

医療系産学連携ネットワーク協議会

大学技術移転協議会（UNITT）

科学技術振興機構（JST）



※新たに科学技術振興機構（JST）が参画

○委託事業において協力者会議が設置されたことに伴い、URAの認定制度等に関する議論・検討は、協力者会議に集約（令和元年7月18日 第2回推進委員会において合意）

URA研修制度に関するアンケートを実施

主旨： 各機関で個別に実施されているURA研修の実態を把握し、今後の高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関するタスクフォースにおける議論に資することを目的とし、URA研修制度のアンケートを実施。

アンケート結果は、研究大学コンソーシアム・シンポジウムにおいて公表するとともに、文部科学省委託事業(受託機関:金沢大学)が試行準備中の認定制度に係る研修制度にもインプットすることを想定。

参考:研究大学コンソーシアムにおけるURAの定義(議論のまとめより)

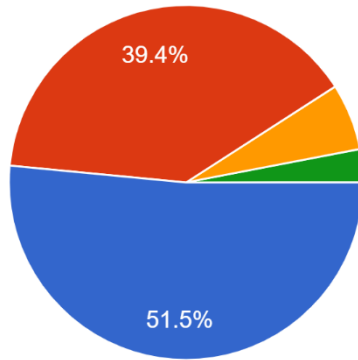
『URAはそれぞれ**コアな専門性**をもつことを基盤とし、大学等の研究活動を、**研究者の視点**および**事務方の視点**の双方からの**横断的な機能**をもって支え、大学等における**研究活動**および**研究力向上**にむけた**取り組み**を**自発的にかつ積極的に推進**する人材。』

<https://www.ruconsortium.jp/site/tf/300.html>

高度専門人材・研究環境支援人材の活用に関するタスクフォース

U R Aの研修を行っているか？

33 responses

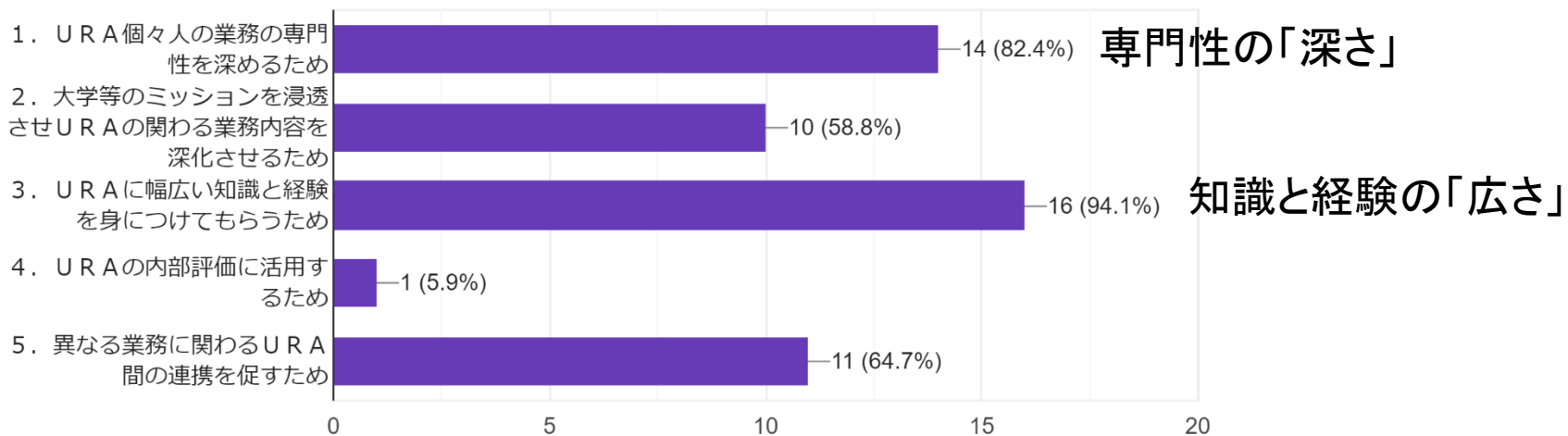


- 1. 組織的に実施している
- 2. 組織的に実施していないが、URAの外部研修受講を奨励・サポートしている
- 3. 組織的に実施していないが、URAが個人的に外部研修を受講するなどしている
- 4. 一切、実施していない

・その他アンケート結果（速報抜粋版）については別途配布。
・今後さらに詳細を分析しTFにて共有予定。

U R A研修の目的（複数回答可）

17 responses



研究力分析の課題 に関するタスクフォース

座長

大阪大学経営企画オフィス副オフィス長

菊田 隆

○以下のとおりワーキンググループを開催し、議論を行っている。

- ・ 人文社会系WG（5月8日） @自然科学研究機構
- ・ 世界大学ランキングWG（6月20日） @自然科学研究機構
- ・ 世界大学ランキングWG（8月5日） @自然科学研究機構

○その他、勉強会など

<勉強会>

- ・ 「New approaches to evaluate research performance of universities
大学の研究力分析の新しい手法について ～Nature Index and Dimensionsを例に～」
2月20日 @自然科学研究機構会議室

<ミニ・シンポジウム>

- ・ 「人文社会系研究の「可視化」手法（評価指標）の現状と課題
～海外及び国内の事例共有とディスカッション～」
6月21日 @東京工業大学蔵前会館

研究力分析の課題に関するタスクフォース

Times Higher Education世界大学ランキングに関する申し入れについて
—研究力に関するランキング指標のより適切な運用を目指した要望—
2019年9月5日発出

以下の項目について、申し入れを行った。詳細は、配布冊子参照。

- 1 THEと日本の研究大学群とのCommunicationの継続について
- 2 研究指標およびcitation指標について
 - A) Citation指標について
 - B) 論文の分数カウントについて
- 3 その他
 - C) 論文指標等におけるFaculty数について
 - D) Non-Englishジャーナル掲載論文の扱いについて
 - E) ランキングの発表の方法について



Duncan Ross氏から、

- 1) 現在、THE世界大学ランキングのメソロジを考え直しているところ。
- 2) 引き続き、ディスカッションしたい。2020年3月に来日予定。
- 3) いくつかの提案について考慮する。

との返答を得た。

国際情報発信 に関するタスクフォース

座長

京都大学国際広報室長
今羽右左 デイヴィッド 甫

○以下のような会合を開催するとともに、メール等により
検討・議論を行っている。

- ・ EurekaAlert! User meeting（2月16日）@AAAS年次総会会場（Washington DC, USA）

○その他、勉強会など

<勉強会>

- ・「EurekaAlert!を活用した国際情報発信にかかる勉強会」

概要: AAAS EurekaAlert!担当チームBrian Lin氏の来日に合わせ、EurekaAlert!を活用した国際情報発信のあり方について、勉強会を開催。

<共催イベント>

- ・「Japan SciCom Forum 2019」4月16日、17日 @東京工業大学地球生命研究所

概要: 科学や研究成果を題材とした広報や情報発信に特有の課題に係る基調講演、パネルディスカッション及びワークショップを開催。

AAASによる英文プレスリリース作成支援サービス(NRAP)



News Release Assistance Program

EurekAlert! is a non-profit, global science news consortium operated by the American Association for the Advancement of Science (AAAS). It disseminates science news to reporters and the public on behalf of scientific organizations worldwide. The News Release Assistance Program (NRAP) is designed to help Public Information Officers (PIOs) with limited resources or a small number of projects to pursue international media coverage through clear, concise and accurate news releases written by experienced science writers.

NRAPの契約をRUCとしてAAASと行い、RUC参画機関で活用。



使用希望の大学・研究機関は、座長ならびに幹事機関にご連絡ください。

令和元年10月18日

(議論の整理)

大学・研究機関が発信する研究成果の国際情報発信・国際プレスリリース(英文)における研究者等の氏名の記述について

研究大学コンソーシアム
国際情報発信タスクフォース

国際的な研究成果の発表や国際プレスリリース(英文)における研究者等の氏名の英語での記述において、日本における姓名の順は必ずしも馴染まない。通常、国際的な研究成果の発表や国際プレスリリース(英文)においては、名-姓の順(例 Dr. Kyoko Yamada)が一般的であり、それが海外メディアにおいても共通認識となっている。また、国際的な研究成果や国際プレスリリースについては国際的なデータベース等が整備され、大学の研究力分析(IR)・社会インパクト評価などに活用されており、国際的に日本人の姓名について混乱や誤解が生じないようにする必要がある。個人の状況や研究分野の特徴等に十分配慮しつつも、国際社会における研究成果・研究情報発信の共通認識・習慣に合わせる事が、日本発の研究成果が国際的に広く認知され、適切に評価されるためにも望ましい。

次ページへつづく

参考: AAAS EurekAlert! Brian Lin部長からの指摘事項と例

- ・ どれが姓 (Last Name) であるか、どれが名 (First Name) であるかをはっきりさせることが最も重要である。
通常、国際的な場では名—姓の順 (例 Dr. Kyoko Yamada) が一般的であり、研究成果の発表や国際プレスリリースにおいても、それが慣習である。
姓—名の順で書くこと (たとえば Dr. Yamada, Kyoko と書くこと) は英語の用法として適切でない。また、Yamada, Kyoko, Dr. のようにカンマを入れるなどして姓を強調したとしても、違和感があり、国際的な研究成果の発表や国際プレスリリース (英文) において適切ではない。
また、姓の文字を、すべて大文字にすること (Dr. Kyoko YAMADA など) は、何かの略語と間違われることがあり、姓の強調の仕方として適切ではない。
- ・ 各大学・研究機関の広報担当者においては、国際情報発信・国際プレスリリース (英文) 中で人物の姓名等について、国際的な共通認識・習慣に従い、可能な限り明確で分かりやすく記述することが求められる。

以上



Japan PIO Summit 2019(2019年11月25～26日)

大学や研究機関の研究広報担当者を主たる対象とした、Japan PIO Summit 2019(11月25～26日、北海道大学)を開催します。

内容: どのようにしたら広報の効果を測ることができるでしょうか。日本の大学や研究機関は、国内向け・海外向けを問わず、より多くのプレスリリースや研究情報の発信を行うようになりました。大学はそのような広報活動を最大限に生かし、基幹的かつ持続的な活動として組み入れる必要があります。広報担当者は、広報戦略を策定し、効果を計測し、改善し続ける必要があります。そこで、広報担当者や科学コミュニケーターが集まり、目標設定や効果計測について学び、議論するために、Japan PIO Summit 2019を開催します。

イベントHPを開設するとともに参加登録の受付を開始しましたのでお知らせいたします。

<https://sites.google.com/view/japanpiosummit2019/home><外部リンク>

●「RUCエグゼクティブセミナー」「RUC人材育成ワークショップ」の実施

これまで、研究大学コンソーシアムでは、各タスクフォースのテーマに関する勉強会等を実施するなどしてきたが、2019年度から、タスクフォースのテーマ以外でも、研究大学群にとって有益と思われるテーマについては、研究力向上に寄与する取組を実施する。なお、実施にあたっての企画・運営は幹事機関において行うものとする。

2019年度は、以下の取組を実施する。

(1)RUCエグゼクティブセミナー(1回)

対 象： 研究大学コンソーシアム全体会議メンバー(理事・副学長等)

テーマ： EBPMの普及展開に関するもの

(2)RUC研究力強化人材育成ワークショップ(研修会)(2回)

対 象： 研究力強化に携わるURAや事務職員など

テーマ： ・研究力分析に関する研修会
・国際情報発信に関する研修会(予定)

研究大学コンソーシアム RUCエグゼクティブセミナー

～EBPM的手法の検証・展開(RUCで実践)～

目的

我が国の研究大学のエグゼクティブに向けて、国内外の研究大学等におけるEBPM的手法の取組・好事例を紹介し、今後のEBPMの取組を促進するとともに、各大学における研究戦略立案、研究力向上に資する。

対象

研究大学のエグゼクティブ・URAなど

取組概要

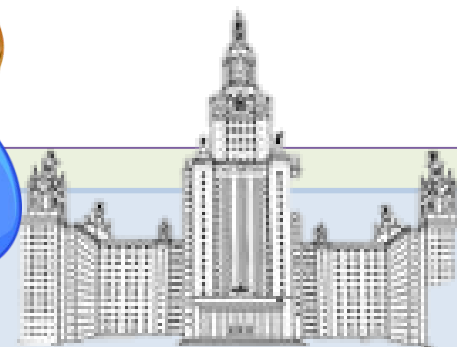
1回開催

RUC(研究大学群として)

EBPMの実践に必要な3要素

1. **エビデンス**の収集と精査
2. **ロジックモデル**の構築
3. 目標に応じた**適切な指標**の設定

研究戦略立案、ロジックモデルの構築、指標設定に関して、海外の著名な有識者による講演、情報交換、勉強・研修などを行うセミナーを開催



EBPMの実践
とロジックモデル
の構築に関
わるセミナー

適切な指標
設定に関す
る情報共有

研究戦略立案にむけたEBPMの実践的取組を支援 ⇒ EBPMの取組の促進

研究大学コンソーシアム エグゼクティブセミナー 「EBPMを活用した大学の研究力強化」

研究大学コンソーシアム構成機関の研究担当幹部の方々を対象に、EBPM(Evidence Based Policy Making)の活用と課題について議論するセミナーとして、有識者による講演とパネルディスカッションを実施しました。

第3種郵便物認可

開催日時: 令和元年8月2日(金曜日)13時30分~17時

場所: AP虎ノ門会議室(東京都港区西新橋1-6-15 NS虎ノ門ビル11階)

司会: 山本 佳代子 日刊工業新聞社 編集委員

プログラム (※当日の資料等は、HPで共有しています。)

・本セミナーの趣旨について

(自然科学研究機構 研究力強化推進本部 特任教授 小泉 周)

・講演

「エビデンスに基づく分析・評価・組織学習」

(政策研究大学院大学 教授 林 隆之)

「EBPM手法の大学における活用 —非財務指標で組織を動かす意義」

(株式会社PHP研究所 PHP総研 主席研究員 亀井 善太郎)

「企業におけるプロジェクトマネジメント事例」

(株式会社タケショー 常務取締役 和田 義明)

・パネルディスカッション

日本学術振興会学術システム研究センター顧問、WPIアカデミー・ディ

レクター 黒木 登志夫 及び各講演者等

根拠に基づく施策形成 議論

事業活動の成果を、重要業績評価指標(KPI)などの数値のエビデンス(証拠)で示し、それを根拠に政策を形成する「EBPM(確かな根拠に基づく政策立案)」が政府の姿勢として強まっている。しかし定型的業務ではない研究で、特に基礎分野が多い大学にはなじみにくい。全国33の大学・機関で構成する「研究大学コンソーシアム」が大学幹部向けに開いたセミナー「EBPMを活用した大学の研究力強化」では、専門家同士が研究評価をする「ブレインユア、アンケート」など定型的な評価も活用すべきだ」との声が挙がった。

(編集委員・山本佳世子)

EBPMについて内配分が合理的であれば、国民の理解も高まるという期待がある。事例などに頼るので、国大学の評価と連はなく、目的を明確に、賞賛交付金の傾斜配分し、効果の測定に重要が始まったのもその一な関連を持つ情報やデータ。しかし研究と教員(エビデンス)に基づくものとする」と示している。国の予算

「定型的な評価活用すべき」

大学連合、研究力強化に生かす

育の指標は簡単には結論が出ない。文部科学省の研究大学強化促進事業を土台とするコンソーシアム(共同研究体)が、セミナーで議論を誘導した。

まとめ役である自然科学研究機構の小泉周特任教授は、研究という山を「頂を示すトップ10%論文」「麗の安定性を見る論文数や著者数」などで説明。

「各エビデンスの限界を知った上で、複数を組み合わせる必要がある」と指摘した。

PHP研究所PHP総研の亀井善太郎主席研究員は、同事業が文色に基づく組織運営で、これらを経営と現



「各エビデンスの限界を知った上で、複数を組み合わせる必要がある」と指摘した。PHP研究所PHP総研の亀井善太郎主席研究員は、同事業が文色に基づく組織運営で、これらを経営と現

場の「コミュニケーション」にすべきだ」と強調した。議論では「論文数や引用数の競争が科学を悪くしている」と取り上げられた。

エビデンスは定型的、定量的の両方を...というパネリストら(自然科学研究機構提供)

研究大学コンソーシアム 研究力強化人材育成ワークショップ

～EBPM的手法の検証・展開(RUCで実践)～

目的

我が国の研究大学のURA及び事務職員に向けて、指標に関する基本的な情報を共有し、EBPM的手法に係る取組・好事例を紹介するとともに、今後のEBPMの取組の促進、**URA-事務連携の強化・促進**に資する。

対象

研究大学において評価、IR等の実務にかかわるURA及び担当事務職員

取組概要

全2回開催

RUC(研究大学群として)

指標に関する
基本的な情報
の共有

連携体制等の
好事例の共有

人材育成
プログラム等
の共有

EBPMの実践には、
大学におけるスムーズな
横連携
「URA-事務連携」が重要

研究戦略立案にむけたEBPMの
実践的取り組み支援

⇒

EBPMの取組の促進、人材育成
URA-事務連携の強化、促進

研究大学コンソーシアム 研究力強化人材育成ワークショップ（第1回） 「ORCIDの活用による大学IR機能の強化とEBPMへの活用」

開催概要

本ワークショップでは、EBPM(Evidence Based Policy Making)に活用可能な様々なスキルや能力について、URAのみならず事務職員も含め、実践にかかわる者が集まり、情報共有を行うとともに勉強・議論する(年2回開催)。

第1回は、EBPMの取組みや大学IR機能の強化にも資するORCIDの活用に関して、好事例及び具体的な活用事例等の紹介を中心として実施する。

ORCIDは世界的に急速な広がりを見せている「研究者背番号」と呼べるものであり、内閣府の示すデータ標準化に明記されたように、日本でも大学IRへの活用等について俄かに議論されている。こうした中、ORCIDコンソーシアムが日本でも立ち上がるなど、組織の枠をこえた全国的な取り組みが始まっている。

このワークショップでは、ORCIDの世界的な動向と日本における導入実績、具体的な活用事例などを中心に、大学IR機能の充実に向けたORCIDの活用について、大学がどのように判断し対応すべきか、昨今の動向も含めて情報共有する。

日時: 10月17日(木) 13:30～16:30

プログラム(予定、講演タイトルは仮案)

講演1 林 和弘 (文部科学省 科学技術・学術政策研究所 科学技術予測センター 上席研究官)

「ORCIDの活用とオープンサイエンスをめぐる世界情勢」

講演2 森 雅生 (東京工業大学 情報活用IR室 教授)

「ORCIDコンソーシアムの活動」

講演3 壁谷 如洋 (自然科学研究機構 研究力強化推進本部 特任専門員)

「ORCIDを使った研究者データベースの整備」

講演4 原 泰史 (一橋大学 大学院経済学研究科 特任講師)

「ORCIDの研究力分析への活用」

講演5 大場 郁子 (Springer Nature, Nature Research)

「Natureをはじめとした学術雑誌はどのようにORCIDを活用していくか？」

～ライフサイエンス系の活用事例など～」

※第二回も今年度中に開催予定